

“農と食” 北の大地から

連載第8回

「定年帰農」の可能性

職場での現役生活を終えたのち、農村地帯に移り住んで「農的暮らし」をめざす人たちが少しずつ増えている。豊富な人生経験を活かしつつ、野菜や果樹の栽培、小動物の飼育などに取りくんでいる道央圏の三つの事例を紹介しながら、ここ北海道での「定年帰農」の可能性や課題を考える。

3年かけ農地取得 教員経験も生きる

後志管内仁木町の中園稔・昌子さん夫婦が営む「ヘルシー果樹園」は、北海道を望む丘陵地帯の一角にある。雪解けの季節を前にして、リンゴの葉が生い茂るようすを想像しながら剪定したり、春先に出産するヤギの乳搾りをど

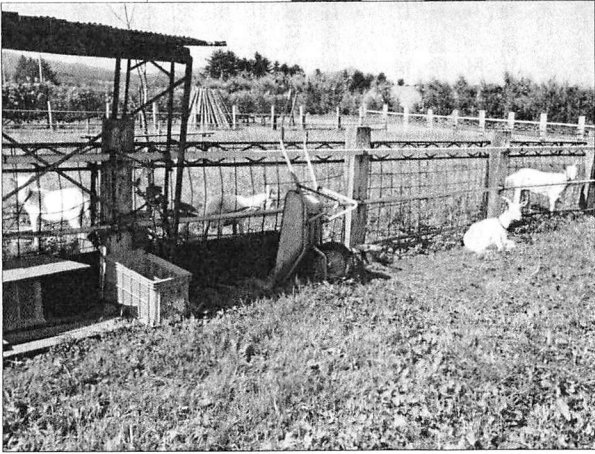
うしたらいいか…などと思いをめぐらせる。馬も二頭飼いで、地力を高めるために馬糞の堆肥を入れて、化学肥料はできるだけ使わない。「経営収支はトントン。プラスチックは健康と生きがいですよ」(稔さん)と、田舎暮らしをこよなく楽しんでいる。

ルポライター
滝川 康治

豊富な人生経験を活かして 「農的暮らし」を楽しむ人たち



18年前に農地を取得し、果樹園をやりながら動物を飼う仁木町の中園稔・昌子さん夫婦。5頭いるヤギを増やして乳を搾り、チーズを造ることが夢という(写真左)



粘土、長いあいだ放置してあった土地だった。休耕田の一部を三年がかりで整備するなど、畑にするのに苦労した。駆け出し教員時代に農業機械を担当したこともあり、機械類の修理や整備はお手の物。定年退職後、自賄いでコツコツやるのが楽しみで、自分たちの支えになった、という。

農場は、草地にしている休耕田が一・二ヘクタール、ワイン用のブドウやサクランボ、リンゴ、ブルーベリーを栽培する果樹園が六十五アール、野菜などの畑が三十六アールあり、残り三ヘクタール弱が山林原野である。ヤギを

五頭飼っており、これを増やして自家用チーズをつくるのが目下の夢。果樹園にヤギを放して下草を食べさせる「立体農業」をめざしている。

農産物は直売主体 田舎暮らしに感謝

畑の大豆をミソにしたり、小豆は餡に、イチゴはジャムに加工する。自家製ワインやリンゴジュースもつくった。

農産物は、農協にブドウを出荷する以外、直売や市場にまわる。

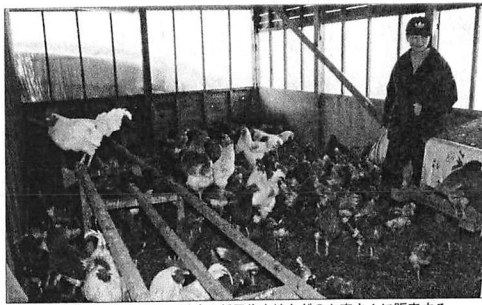
昌子さんは、近隣の町で無農薬栽培などに携わる新規就農者グループ「百姓クラブ」の会員で、昨年は小樽の都通商店街で行なった直売会に初めて参加した。赤井川村内の体験観光施設「ホビの丘」でも直売をやっている。「都通りでは野菜に虫がついていても『安全です』とPRしています。自分が

育てた物を売るのがとても面白い。やみつきになっちゃいます」(昌子さん) 稔さんは糖尿病の治療歴が十年にわたるが、作業に汗を流すことで健康を保ってきた。定年帰農の効用をこう語る。「丘に上って日本海を見つめ、遠くを見ながら物思いにふける——緑はストレスを取り除いてくれるし、町の生活にない豊かさを与えてくれる。心も体もバランスが取れた状態で、田舎暮らしには人間本来の姿があります。(退職前は組織のなかで働いてきたけれど、ここでは畑や小屋づくり、家畜の飼育…)と自分の発想で納得した作業ができる。物事を成し遂げたときの感動が得られることを、定年帰農のなかで一番感謝していますね」

わたしは高校時代、新米教師・中園さんの教え子の一人だった。農業高校といえども、当時の恩師のなかで定年帰農の道を選んだ人は数少ない。土臭さを失わない元教員は、とても貴重な存在だと思う。

54歳の時に脱サラ 自給自足の夢実現

「定年後は広い土地を買って土いじり



田中農場の有精卵は、近くの新興住宅地などのお客さんに販売する

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

夢は果樹園での小動物の放し飼ひ

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

をしよう」と思い描いてきた夢が、脱サラして農業を営む形で実現したのは、石狩市高岡の田中勝吉・民世さん夫婦である。三年前、同市の新規就農第一号に認定され、無農薬で多品目の野菜を作る一方、知人らとのつながりを大事にした農業を楽しんでいる。

①家族と仲間のために安全と味を追求する
②新しい農業の方法を積極的に取り入れる
③体力が落ちてもできる農業の模索

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁



たわわに実った「ヘルシー果樹園」のブドウ

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

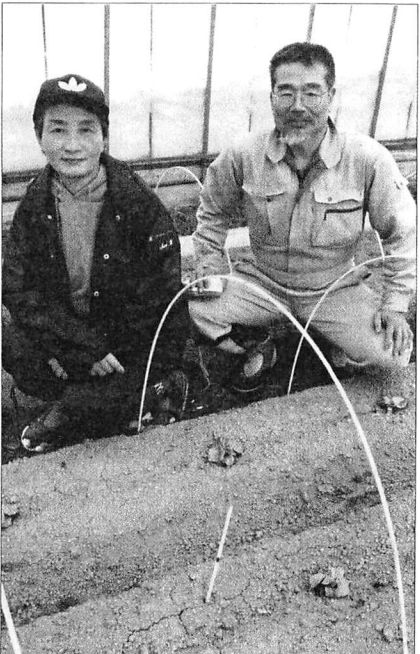
札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁



無農薬で多品目の野菜を作る石狩市の田中勝吉・民世さん夫婦。冬のハウスでレタスも育てている。

無農薬の野菜を 知人らに対面販売

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁

はあらゆる土地の食品や環境についていけないんだよ」

と繁さんが力説すると、郁子さんが、「美味しいものを作って孫や子に食べさせ、自分の食べ物と少し余分があればいい。適当な労働は医療費を抑制するし、健康な生活が送れて、それが国民のためにもなるんじゃないか。仁木の農場で草むしりをしたり、果物を収穫したい人は大歓迎。きてください」と言って声を弾ませた。

ゆくゆくはヤギを飼ってチーズを造り、鶏や羊、豚も放して自給自足に近い生活をしたい——と夢を描く志羅山さん一家。農場は「さいゆうき」と命名し、「西遊喜(札幌)の西で遊び喜ぶ」再勇氣・菜有機」という三つの意味を込めている。

志あらば道は開く 多様な就農に希望

これまで紹介した定年帰農の人たちに通するのは、田舎暮らしを楽しむつつ、これまで培ってきたさまざまな人脈を活かして販路を開拓していることだ。農村出身の志羅山さん、農業教育畑が長かった中園さんは帰農しやす

い経験の持ち主だが、田中さん夫婦のように周囲に恵まれて農の人生を実現させた人もいる。志があれば新しい道が開ける、というお手本だろう。いずれも、農業関係者ら周囲の人たちに大きな刺激を与えている。

とはいえ、農作業には肉体力労働がつきまとうし、まとまった資金も必要だ。実際に就農するために、どんな心構えが必要なのか——意見を聞いてみた。

「定年退職後の就農は肉体的にもきびしいので、退職前から準備してやるほうがいい。それに、農業に対する根柢からのこだわりがないとうまくいきません。わたしは動物好きですが、逆に自由にならないし、制約を受ける面もある。でも最近、ヤギの鳴き方が少しずつ分かってきて、彼らの草丈でそれなりの対話ができる。(定年帰農を志す人は)頭のなかで夢を抱くけれど、感性豊かな人でないと田舎暮らしが退屈になって満足できないでしょう。自然体で無理せず、自分の足元を固めながらやる」とい「中園さん」

「基本的に借金はできない」という前提で、農業収入に頼らず生活できるペー

やっているように思っても、実際には周囲の人の助けが必要なので、村のなかに溶け込める場所を探す——この二つがあれば、ある程度いける。(就農に対する)夫婦間のコンセンサスは最低限の条件。計画どおりにはなりません。自分なりに農業のやり方を描いておくことも大事です。それと、農地や建物を購入せずに、できるだけ借りて営農する方法もよく検討するとい、年をとってから無理な計画を立てないことですよ」(田中さん)

不況の影響もあって北海道内では新規就農を志す若手の人たちが増えているが、本州とは違って、定年帰農の道を選ぶ人はまだまだ少ない。これまでは「二ヘクター以上」という農地の取得条件が、新たに農業を始めるときの障害になってきた面もある。

が、一部地域ではこれを「二十アール以上」に緩和しようとする模索も始まっている。より少ない面積で、気軽に土や動物たちとふれあい、多様な「農の営み」を創っていくことは明日の北海道農業への希望にもなる。定年帰農に取り組みやすいシステムづくりも必要ではないだろうか。